

頭では、感染後84日から同様の変化を認めた。

2. ELISAによる抗犬糸状虫抗体は総白血球・好酸球の増多に一致して陽転したが、74日目に明らかな好酸球増多が認められた2頭では、他の1頭の倍以上の高値を示した。

今回の実験結果は、皮下に注入した犬糸状虫感染幼虫が第5期に至る4回目の脱皮期まで生存していたことを示唆するもので、固有寄生場所である肺動脈に到達できる可能性が示唆された。さらに胸部X線写真などを検討し、霊長類における犬糸状虫の次のステージへの发育状況を把握していくつもりである。特に、この実験系は感染からの抗犬糸状虫抗体の持続期間を検討する上で、ヒト犬糸状虫症のモデルとして大いに役立つと思われる。

自由 : 27

ニホンザル野生群におけるオス間関係

高橋弘之(京都大・理)

ニホンザルの野生群における群れオス間の個体間関係には群間変異がみられることが報告されている。本研究の目的は、オス間関係の変異を引き起こす要因について明らかにすることである。

調査対象は、宮城県金華山島に生息するニホンザル野生群(A群)である。1993年の出産期(4-5月)、交尾期(10-11月)、1994年の冬期(2-3月)の3シーズンについて、群れオスを個体追跡して、グルーミング、近接等の社会的相互交渉の資料を収集した。調査結果は整理中であるが、1992年の交尾期と1993年冬期に収集した資料も含めて、これまでに明らかになったのは以下の点である。

1992年の交尾期から1993年の出産期まで、1位から5位までには、移出入および順位の変動はみられなかった。1993年の冬期には、2頭が6位と7位で移入したが、いずれも冬期中に移出した。1993年の出産期と交尾期の間に1位と2位が移出した。3位から5位は群れにとどまり、そのまま順位が上昇した。1994年3月現在で、群れオスはこれら3頭となった。交尾期には群れ外オスが現れたが、群れオスとして定着はしなかった。

1992年交尾期から1993年冬期までは、4位-5位間で、最も多くグルーミングが観察されたが、1993年の出産期からはグルーミングが観察されなくなった。しかし、これら2頭の、メスとのグルーミング関係に変化はみられなかった。また、

1993年交尾期と1994年冬期には、群れオス間でのグルーミングは観察されなかった。

1993年の冬期以前と1993年の出産期以後とは、オス間のグルーミング関係に変化がみられた。このことから、オス間関係は、群れ滞在期間や順位の変動によって、それぞれの個体の社会的地位が変化することに影響されるものと考えられる。また、メスとの社会関係が変化しなくとも、グルーミング関係が変化したオスの組み合わせがみられたことから、メスとの社会関係だけからオス間関係を結論づけることは難しいと思われる。

今後も調査を継続して、通時的な資料を蓄積すると同時に、群間比較を行うことが必要であると考えられる。

自由 : 28

Laterality in the spontaneous behaviors of free-ranging Japanese macaques (*Macaca fuscata*)

Linda A. Turner, Kyoto University, Faculty of Science, Department of Zoology, Laboratory of Human Evolution Studies

Study site : Iwatayama Monkey Park,

Arashiyama, Kyoto, Japan

Study dates : Oct 1992 - July 1993, Sept-November 1993

The spontaneous behaviors of members of the free-ranging Arashiyama E troop of Japanese monkeys were observed over a period of 14 months. Subjects were 89 adult, subadult and juvenile male and female monkeys, and 22 male and female infants born in 1993. Most monkeys displayed no significant hand preferences in their manual activities, although a slight right hand preference for both combined touching of the inanimate environment and combined hand and foot responses directed to their own bodies was observed. No significant interactions were detected between hand preference and age or sex. Six out of 22 mother monkeys displayed statistically significant hand preferences when cradling and reaching for their newborn infants. Infants had both nipple and positional preferences on the mother's ventrum, although most were not significant. Both the strength and direction of the mother's cradling preferences and their infants' preferred position on the ventrum were significantly correlated. There was a significant